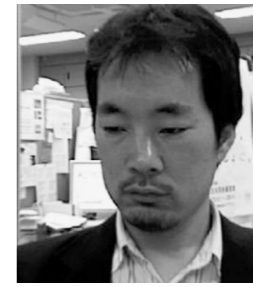


NPOSSER

SHIKOKU
SPORTS
ENVIRONMENT
RELATION

石巻からの、報告。



NPO SSER事務局長
白川 淳 (36) 愛媛県

「この思いを忘れず、今後の活動に活かす方法をしっかりと考えたい。」

石巻市内の全避難所が閉鎖されたというニュースを聞きながらこの原稿を書いています。私が被災地を訪れた6月下旬は仮設住宅への入居が始まった頃であり、支援活動の転換期と言われていました。地域コミュニティの構築、被災者の自立ということがあちこちで議論されていました。現地

でのヒアリング調査ではNPO SSERの緊急支援活動の確かな成果を感じるとともに、今すぐには何も出来ないもどかしさも感じました。この思いを忘れず、今後の活動に活かす方法をしっかりと考えたいと思います。



NPO SSER理事
山崎 洋靖 (48) 愛媛県

「自尊自立」

石巻・女川での支援活動の第2陣として22日に松山を出発し、福山市で仲間2名と合流、石巻商業高校の避難所へ到着したのは翌朝でした。瓦礫で埋め尽くされた被災現場を目の当たりにし言葉も出ず、ただただ津波の脅威に胸を締め付けられました。頻繁に起こる震度5クラスの余震に怯えながら、炊き出しや他の避難所の調査を行いました。女川原発の避難所では、「ここはまだ暖房があるからまし」と3歳の子のお母さんが言うほど、どこの避難所でも皆さん寒さに震えているのが現状で、一刻も早い支援物資の供給が必要でした。現地入りして3日経った朝、避難所にいる女川第四小学校の卒業式に出席させていただき、卒業生は身内を失いながらもこれから一生懸命生きていくぞという強い意志を自らの答辞で述べていました。避難所の玄関に掲げられている「自尊自立」という言葉が強く心に残る支援活動でした。

頻繁に起こる震度5クラスの余震に怯えながら、炊き出しや他の避難所の調査を行いました。女川原発の避難所では、「ここはまだ暖房があるからまし」と3歳の子のお母さんが言うほど、どこの避難所でも皆さん寒さに震えているのが現状で、一刻も早い支援物資の供給が必要でした。現地入りして3日経った朝、避難所にいる女川第四小学校の卒業式に出席させていただき、卒業生は身内を失いながらもこれから一生懸命生きていくぞという強い意志を自らの答辞で述べていました。避難所の玄関に掲げられている「自尊自立」という言葉が強く心に残る支援活動でした。

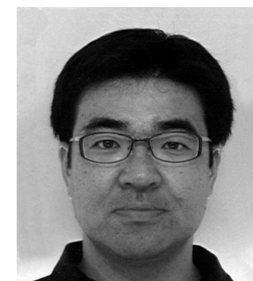


NPO SSER理事
麻生 賢司 (49) 広島県

「この経験は何処かで役に立てたい。」

SSERから「石巻に行きます。」との連絡を受けたのは震災発生から5日程経過したときでした。しかし、阪神大震災の時もそうだったが、一般の人は現地に入れないのではと一瞬思いましたがSSERはすでに災害派遣の許可を取得できて石巻商業高校に到着できることになったのです。現地に着いて、石巻市内、女川町の災害現場をこの目で見て一瞬疑いましたが、現実

でした。住むところがない、食べるものが無い、今の日本ではありえないことなのですが実際に目の前でそれが起きていました。石商では毎日食事の準備をしていました。みんなで力を合わせてしましたが、10日間の滞在でそれしかできませんでした。何かほかにかも想うのですがいざというときにはできないものです。この経験は何処かで役に立てたいのですが、そうでない事を祈るばかりでした。



NPO SSER理事
厚主 和雅 (41) 愛媛県

「この先、何度でも訪れます。」

到着当初は騒然とした状況で、何をどうすればいいのか誰も解らない状態でした。そんな中、我々の野外での経験やケータリング設備が生かされたのではないかと感じます。4月11日に引き上げる際、思いもよらない程、皆さんに感謝され、何故か涙が止まりませんでした。被災地の状況にあるこの

地から離れる申し訳ない気持ちからだったのかもしれない。「本当に役に立ったんだろうか?」と思い悩んでいると現地の方から「出来る人が出来ることをすればいい」と声をかけて頂き、また逆に助けて頂きました。元気を与えるつもりが、逆に元気をもらう毎日でした。この先、何度でも訪れます。ありがとうございました。

活動報告のごあいさつ 「自然災害の多いわが国において、常にそなえ、常にわたしどもの出来る最善の活動のために。」



NPO SSER理事長
山田 徹 (56)

2011年3月11日午後4時ころ。わたしたちは通常のSSERの活動のため、琵琶湖を訪れておりました。車中でそのニュースを聞き、次々と流れる不確かなものの戦慄を覚えるような光景に言葉を失いました。そのあとの予定を全てキャンセルして、直ちに本拠のある四国に取って返しました。NPO SSERのメンバーに招集をかけるまでもなく、皆がわたしたちの能力で出来ることをしようと集まってきておりました。わたしたちは日ごろは国内外のラリーなどスポーツイベントを主催する団体です。その組織から一部をNPO化し、自然環境の保護と利活用またスポーツや教育プログラムの運営などあわせ、災害時の支援活動などを標榜しておりました。本年

で15回大会を迎えたモンゴルのラリーを例に挙げますと、ゴビ砂漠の水も電気もないところでレストラン・メディカルテントを設営し、数百人にのぼる競技参加者・スタッフに温かい食事や医療の提供を行っています。したがって本部には大量の機材が常に備えられており、それらを運ぶための大型の4輪駆動のトラックや人員を運搬するマイクロバスやそのほか4輪駆動車が常備されており、かつそうした技術に優れた者が大勢集って居るのです。この機材と能力を提供するべきである。という結論に時間は必要ありませんでした。出発の準備よりも緊急車両登録に時間を要し出動が予定よりも大幅に遅れることとなってしまいました。そのぶん

全国から大勢の仲間が交代で参加するという自律的で継続的な支援体制が構築されていきました。また菅原義正様と中島祥和様の呼びかけで大勢の方々からは、温かい励ましと寄付を頂戴いたしました。その思いを全て被災地の活動に活かせるという思いもあります。私どもの成せたことなど誠に微塵たるとの思いで心が痛みます。ここに報告書をまとめつつご支援を賜りました皆様に、あらためまして深く深く感謝の意を表します。末尾ながら、わたしたちはこうした自然災害の多いわが国において、常にそなえ、常にわたしどもの出来る最大の活動のために日々を精進してまいることをお約束として支援に関する御礼のごあいさつといたします。